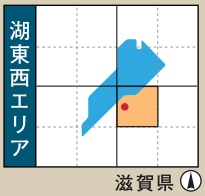
史跡

国指定

大中の湖南遺跡

だいなか　こみなみいせき

安土町大中　昭和48年4月14日指定



戦後、食糧難解決の手段として、琵琶湖周辺の内湖は次々と干拓され、農地に変わっていきました。昭和39年、琵琶湖最大の内湖、大中の湖が干拓され、水が退き始めた湖底から古代の貨幣がたくさん見つかりました。これがきっかけとなり発掘調査を実施したところ、湖底から弥生時代中期の集落が姿を現しました。

当時のできごと	
弥生時代中期	近畿地方では銅鐸を用いた祭祀が行われる
紀元前後	倭人が百余国に分かれるとある
BC4年	この頃キリストが生まれる

大中の湖南遺跡

遺跡は、湖岸の砂州上と、その背後の湿地上に立地し、その規模は幅約150m、長さは約1600mの範囲に広がります。住居域と水田域に分かれ、その間には、幅約7mの灌漑を兼ねた水路が流れています。この水路や、水田の畦は矢板や杭で護岸されており、この集落の人達が高度な土木技術を持っていたことをうかがわせます。

水中に没していたため、土器類の他、木製品が多量に出土しています。木製品の中には作りかけの農具が多く含まれ、この集落が他の集落に農耕具を供給する、拠点的な集落の一つであることがうかがえます。なお、これらの木製品は、遺跡とは別に、滋賀県の文化財として指定されています。



畦や水路に打たれた矢板と杭



木製農具の未製品

大中の湖南遺跡と稲作

大中の湖南遺跡を始めとする、弥生時代の特徴は、稲作と金属器の利用の始まりに求めることができます。稲作の開始とその定着は、食糧の備蓄を可能にし、この生産拡大のためには、金属製の工具が大きな力を発揮しました。農地の拡大のためには、大勢の人達が力を合わせる必要があり、やがて、金属製品を独占し、これらの人達を束ねる有力者が現れ、これが後の「王」につながっていきます。

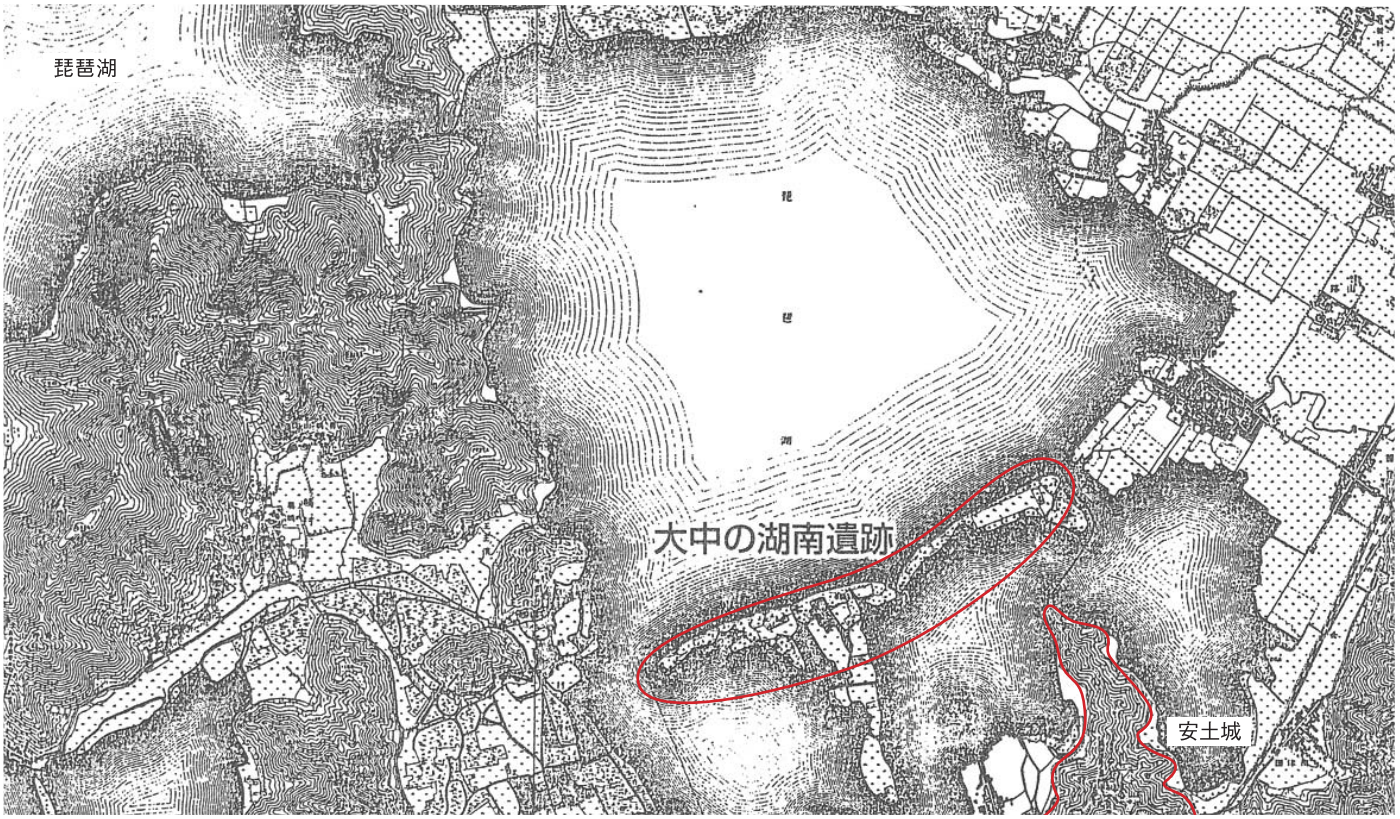
県内には、守山市服部遺跡、下之郷遺跡（学習シートNo.020）を始めとする大きな弥生時代の遺跡が多数あり、豊かな琵琶湖の水を利用した稲作が、古くから行われていたことがわかります。



出土した弥生時代中期の稲束

大中の湖南遺跡と湖底遺跡

大中の湖南遺跡は、現在では陸化していますが、かつては内湖の中に沈む、湖底遺跡の一つでした。琵琶湖の水位は、長い年月の間に様々な原因で大きく変化し、かつて陸上であったところが、水中に没してしまうことがあります。こうして形成された湖底遺跡が、琵琶湖の周辺には100カ所余り知られています。湖底に沈んだ遺跡は、通常の遺跡では残りにくい、木や蔓で造られた植物質の道具や、植物質食糧、動物の遺体などが良好に残り、当時の生活を生き生きと現代に蘇らせています。



明治時代の大中の湖周辺　内湖に突き出た砂洲の周辺に遺跡が広がる



湖底遺跡の調査（新旭町針江遺跡から見つかった弥生時代前期の家）

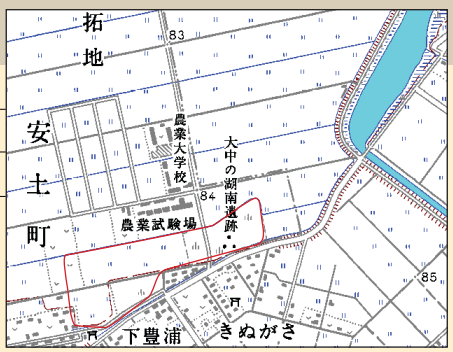
関連する文化財

服部遺跡（守山市）	弥生時代の大集落。大規模な水田遺構が発見された遺跡としても著名
下之郷遺跡（守山市）	学習シートNo.020
赤野井浜遺跡（守山市）	琵琶湖湖岸にある縄文時代から中世までの複合遺跡。弥生の木製品が大量に出土

もっと深く知りたい

安土城考古博物館	☎0748-46-2424	蒲生郡安土町下豊浦6678
滋賀県埋蔵文化財センター	☎077-548-9681	大津市瀬田南大萱町1732-2
守山市立埋蔵文化財センター	☎077-585-4397	守山市服部町2250

大中の湖南遺跡へのアクセス　ＪＲ琵琶湖線　安土駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　　平成16年3月